

第三章 先史時代

一 無土器時代、旧石器時代と縄文式土器時代

従来日本先史時代は縄文式土器が使われた約七千年前、狩猟をしていた祖先の暮しから書きはじめられ、中国大陆からの農耕文化の伝来と共に、弥生式土器の時代が約二千年前からスタートするとされてきた。ところが昭和二十四年群馬県等懸村岩宿の赤土より、黒耀石でつくられた槍先形の石器類が出土するに及び「日本にも旧石器時代があった」、「無土器文化の時代が一万年以上昔にあったのではないか」と云う意見が出、論争せられた。その後北海道、長野県、或は関東の各地から土器を伴わない「打製石器」が次々と発掘され、これを証明したが、西日本でも香川県坂出市の国分台から約二千個の完全な石器と、数万の石片が出土している。また昭和六年兵庫県明石で明石原人の遺骨が発見されている。こうしたことから、瀬戸内海沿岸には原始人が集団して、しかも長期にわたって生活したものと考えられている。

二 吉野川流域の人文

瀬戸内海沿岸が日本民族の揺籃であるとすれば、内海と太平洋とが突き合い、紀伊文化の潮流の注ぐ阿波海峡を河口として四国の脊梁を貫流する吉野川とその水域は人文が早くより進出せざるをえない地利にある。しかも阿波池田町は土讃予何れからするも至便な地点であり、当然瀬戸内文化の進出が考えられるのである。

大正十一年阿波池田町の吉野川辺で多数の縄文式土器、弥生式土器が発掘され、その穴居の底土には焚火の跡まで残されていた。また白地台地からは石簇が、白地の西、佐野からは弥生式土器が出土し、更に長駆遡上して土佐町田井の上野台地からは船元式縄文土器が出土している。その出土品が池田出土品と種類、形状共に酷似しているところから、祖先達は定住地の漁猟が減少すると次々と新しい猟場を求めて川を遡上したものと考えられる。このことは徳島県山城町大川持から石斧が、同西祖谷山村吾橋から弥生式土器（明治四十年）本山町北山から石斧が出土していることから容易にうなづけるのである。

三 先住民族はアイヌ

是れより先、日本には東北地方にアイヌ種族が先住していた。アイヌはもともと白色人種で東大陸に移動したものである。日本では古来蝦夷とも云った。語源も日本人と類似し、性格も勇猛果敢、宗教神話等もよく日本の神道に似ている。

昭和三十四年長崎大学医学部安中正哉博士のまとめた「高知県長岡郡住民の手掌理紋並に指紋の研究」によると結論として南部平坦地に居住する人達と山間部の人達とは手掌理紋の上に大きな差があることを具体的に示している。この事から西村自登氏は南部平坦地の住民は漁撈を生業とする南方黒人種の系であるとし、山間地住民は狩猟を業とする北方白人種アイヌ系であると断じている。

ではそのアイヌがどうして四国に渡ったのか、これについては俘囚を挙げる。

俘囚は投降した蝦夷をいう。日本武尊以来の東夷征伐により多くの蝦夷が投降し、長い年月の間には西日本にまで

移された。もとより漁、狩猟の民であるから農耕の道を知らない。これを指導して農耕を教え、これになじむ迄は国内の農家から稲で税を収めさせ、彼等を養った。その税額が延喜式廿六卷の主税式の条に見える。その一例に「相模国俘囚料二万八千六百束、武蔵国俘囚料三万束」等各国の正税のあとに必ず記載されている。その国々は五畿内を除く七道の殆んど各国に亘っているところからアイヌの血は全国的に混じったものと見なければならぬ。

四 アイヌ族の吉野川上流への移動

吉野川口より移動、美馬三好の山地に集落をつくつていたアイヌ族も忌部族の圧迫等により、逐次吉野川沿いに奥地に移動をする。そして山地の開拓者となり、自から平地の開拓者と伝統、習俗を異にし、その集落の長はやがて佐伯氏等の名門となるのである。アイヌの地名で最も多いのが「沢」を意味する「ナイ」である。

即ち北海道で幌内、稚内、真駒内等、ついで東北に多く白河の関以南には全然ない。

吉野川の支流に穴内川あり、その上流に穴内なる部落があり、その氏神星神社の棟札に大願佐伯武賀（永禄十丁卯年）とある。氏神を護る氏族の民族的由来を説明して余りありと云えよう。

五 祖先の定着

吉野川、その支流の谷々に沿って尾根を伝わつて来た祖先の一族は、まず水のある所を選定して居住地を定めた。

そして周囲の焼畑からの自給農業がはじまる。

家は焼畑による火災または暴風による山崩れや流水に犯されない安全な所、それはまた禽獣の被害も少なく、見晴らしもよく陽だまりでもある山腹の小ひだの頂部に家を構えて、屋敷林も作るという各戸が独立した散居の形である。

自給の見こみが立つと親はそこに長男を残し、二、三男をつれて次の個所をもとめ最後に末子の家で世を終る。所謂隠居開拓方式が私達祖先の定着のあり方であったようである。